自由であるということ……旧約聖書を読む

　　　　　　　　　　　　　　　　エーリッヒ・フロム著　飯坂良明訳

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　河出書房新社　　2010年出版

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　報告者　松本倫明

~第一章　序説~

旧約聖書の目標

旧約聖書は単に、西洋の三大宗教の源泉をなしているから重要であるというだけではない。「旧約聖書はまさに革命的な書物である。(P11)」その書が目指すものは、人間の解放—個人、民族、人類全体に自由を得させること―である。

ヒューマニズムとは

旧約聖書を解釈するにあたって、フロムは徹底したヒューマニズムの立場を取る。そこでヒューマニズムの説明がなされる。

|  |
| --- |
| 人類の一体性、自己の能力の開発→内面的調和と世界平和への人間の可能性 |
| 人間の目標=完全な独立…虚構や幻想を超えた十分な現実認識 |
| 暴力を疑問視←暴力は人間の理性と感情を歪め、幻想を信じさせる |

ヒューマニズムが目指すのは、全世界的な個人の内面的な独立と世界平和である。

ユダヤ人は歴史上、自分の国を失った。然しこの事実すらヒューマニズムの観点からは幸福であった。なぜならそれは世界的なヒューマニズムの伝統を維持、発展させることを可能にしたからである。

~第二章　神について~

神概念の変化

心理的、精神的な経験に関する事象を指す言葉や観念は、それを用いる人が変わるに従い、変化する。また観念に関する経験は共有される考えがある。

旧約聖書の神観念の歴史には、以下の共通した考えがある。

|  |
| --- |
| 自然や人工のものは究極的実在とか至上価値を成さない |
| 人間にとって最高の価値、目標を表す唯一者が存在する |
| 人間に与えられた愛と理性の能力を最高度に発展させて世界と合一することを目指す |

一方、この神観念もそれ自身の生命と発展をもっている。

1. 知恵の実

神は自然と人間を作った絶対的支配者として描かれていた。然しこの絶対的権力は、人間が神に対抗し得るという考えと並立している。人間は「知恵の実」「命の実」を食すことによって神の地位に立つことができる。そしてアダムとエバは知恵の実から食すのである。ここから人間は神の至上権に挑戦する。「人間の最初の行為は反逆であ(P30)」り、「人間の自由の始まりでもある(P31)」のである。これに対し、エデンからの追放という暴力行為を神は用いる。

1. 神観念の矛盾

神は最高の支配者であるが、一方で、自己の内に神たる可能性を有した存在、人間を生み出した。人間が開花すればする程、人間は神に等しくなっていく。

1. ノアの方舟————神との契約

神は勝手極まる支配者として現れる。神は地上の生命を破壊しようと決意するが、後に自らの決意を後悔し、ノアと契約を結ぶ。

この契約は神観念の遥かな発展、成熟への進歩を意味する。なぜならこれは「完全な人間の自由、神からさえも自由であるといった思想に道を拓く一段階であった(P32)」からである。

契約の締結は、神から恣意的な自由を奪い、人間に神に対抗しうる自由を与える。またこの第一の契約は神とヘブライ族の間ではなく、神と人類一般の間のものであった。

1. アブラハム―—————神への要求

神との第二の契約はヘブライ人との間に結ばれるが、神の祝福は、全人類に及び、普遍主義が表明されている。この契約の結果は、アブラハムの神に対する正義の要求に現れる。神が悪い二人の為に五十人を滅ぼそうとしたとき、アブラハムは、神が約束を蔑ろにすることを責める。ここで彼は「要求する権利をもった自由な人間(P37)」となる。そして神は拒否する権利を持たない。

1. モーセに対する神の啓示

|  |  |
| --- | --- |
| (自然の神より)歴史の神 | 名前をもたない神 |

神はモーセに対して名を明かさない。然し偶像崇拝的観念(全てのものは時間と空間の中で完結するから名前をもつ)に慣れたヘブライ人にとって、名のない歴史の神は意味をなさなかった。神はこれに譲歩して、<名無し>という名を出して、妥協する。名がない理由は、最終的な形になったもののみが名をもつ以上、歴史の神として、神は「生きた過程、生成」だからである。

神はヤハウェという名で表されることがあるが、その名も無益に使われることはない。神を表彰することは禁じられる。人間は祈祷において、神へと語りかけることはできるが、神について語ることはできない。

1. マイモニデス神学

名前のない神という観念から、マイモニデス神学が生まれる。それは神の本質を表すのに、肯定的名辞を用いることはできないというものである。この否定の神学の結果として、神学は終焉を迎える。なぜなら神について何も語り考えることができない以上、「神の科学」はあり得ないからである。この神学からは以下の二つの問題が提起される。

|  |  |
| --- | --- |
| 聖書、ユダヤ教における神学の役割 | 人間が神に存在を主張することの意味 |

神学の役割

神学の役割、正統(正しい信仰)について、聖書もユダヤ教も以降、神学を発展させなかった。神が存在するということのみが旧約聖書で見られる神学的教義であり、神について[[1]](#footnote-1)語られることはない。

神の存在を認める意義—————偶像否定

ユダヤ教は神の存在のみを重要な思想としたが、この神学は抑、偶像の否定である。全く、偶像の否定は旧約聖書を貫く宗教的主題である。

1. 偶像とは何かを知る為に、神は何でないかを理解しなければならない。最高の価値、目標である神は、人間、国家、制度、自然等から作られる物ではない。一方、数々の偶像は諸々の人間の熱情が表された物である。人間は偶像に多くを捧げる程、貧困化する(疎外)。
2. 偶像は<もの>であり、生きていない。一方、神は<生ける>神である。偶像は死せるものである。それを造り拝む者も又死せるものなのである。

偶像崇拝対神信仰

偶像が人間の能力の疎外された形である以上、偶像崇拝は必然的に自由や独立と矛盾する。一方、神や聖書は人間に自由を許容し、アブラハムやモーセとのやり取りの中で、人間の神に対する恐れと従属は減少する。神は更に人生の目標とその道を示し、決して無理強いしない。「偶像崇拝はその性質上、隷属を要求するが、その一方、神礼拝は独立を要求する(P62)」。

* 本書において「偶像学」は主な論点とはならないが、それについて有益な指摘がある為、抜粋する。

|  |
| --- |
| 「偶像学」は、疎外された人間は必ずや偶像崇拝者であるということを教える。というのは、その人は自己の生きた力を自分の外にある物の中に移入することによって自己を貧困化するとともに、自分を少しでも保持し、ぎりぎりのところで、自己の同一性を保とうとして偶像崇拝に陥らざるを得なくなるからである。(P64) |

偶像崇拝とは人類は一致団結して戦わなければならない。万人の救済にユダヤ教の信仰は必要ではない。偶像崇拝をし、神を冒涜しない限り、救われる。

名前のない神の意義

本質的属性を持たない神は、偶像崇拝ではないので、権威主義的であることを止める。人間は真に独立しなければならない。これは人間が神からも独立していることを要求している。

~第三章　人間観~

1. 筆者が「について」を強調するのはこの言葉は「物」についてのみ使われるからである。 [↑](#footnote-ref-1)